〔研究ノート〕

腹上死について

佐立治人

一

「腹上死」という言葉は、瀧川政次郎『池塘春草』（青蛙房、昭和四十三年）が指摘するように（十四、くさぐさの話「腹上死」）、『洗冤集録』巻五、四十五「男子作過死」の次のような文章に由来すると考えられる。『洗冤集録』は、南宋の宋慈が著した、現存する世界最古の体系的法医学書である。『叢書集成初編』所収本を見た。

【訓読】

凡そ男子、作し過ぐること太だ多く、精気耗尽して、婦人の身上に於いて脱死する者は、真偽、察せざる可からず。真なれば則ち陽、衰えず。偽なる者は則ち痿ゆ。

【原文】

凡男子作過太多、精気耗尽、脱死於婦人身上者、真偽不可不察。真則陽不衰、偽者則痿。

【和訳】

およそ男子が性交をしすぎることが甚だ多く、精気が消耗し尽し、女子の体の上で虚脱して死んだとされる場合は、真偽を見分けなければなりません。真実であれば陽物はしぼんでおらず、偽りであれば陽物は萎えています。

『洗冤集録』のこの文章は、元の王与が著した『無冤録』に引き継がれた。『無冤録』巻下、三十六「男子作過死」に、「凡

男子作過太多、精気耗尽、脱死於婦人身上者、真偽不可不察。真則陽不衰、偽者則痿。」と、『洗冤集録』と全く同じ文章が記されている。『無冤録』は、『韓国科学技術史資料大系』（驪江出版社）医薬学篇四十九所収『新註無冤録』を見た。朝鮮で『無冤録』に注をつけて刊行された『新註無冤録』を我が国の河合甚兵衛が抄訳し、明和五年（一七六八）に刊行された『無冤録述』の巻之下「男子作過死」には、「男子、房事が太多（はなはだ）く過（すぐ）れば、精気が耗尽脱（むなしくつきぬけ）て、婦人の身の上で死る者あり。これにも偽（いつわり）てこしらゑものが有こともあるべし。真にそれなれば、死て後までも陰莖がきつと怒長（をへ）て居るもの也。にせ物は痿（なへ）て有也。」（片仮名を平仮名に変え、句読点をつけた。）と和訳されている。

瀧川『池塘春草』（前掲）は、「江戸幕府の検屍役人は、この書（『無冤録』を指す。佐立注）を和訳した本（『無冤録述』を指す。同上）を読んでいた。「身上死」を「腹上死」と改めたのは、どうやらその翻訳者の仕業らしい。従つて腹上死という語は、江戸時代の検屍役人の口から一般にひろがつたもので、この和訳本が出版された享保（ママ）年代より古いことではない。」と述べるが、『無冤録述』には「腹上死」という言葉は出てこない。

「腹上死」という言葉は朝鮮で生まれたらしい。久保信之「台湾ニ於ケル二三ノ興味アル法医学的観察」（『台湾医学会雑誌』第六十三号掲載、明治四十一年）に、「韓国にては交接中の死亡を「腹上死」と名け、人生無上の幸福と為し、而して其多くが脳出血なることは、竹中成憲氏の記述する処とす。」（十頁。片仮名を平仮名に変え、読点をつけた。）と記されている。この「竹中成憲氏の記述」がどこに載せられているのかわからない。竹中成憲という人は、東京出身で、明治二十年に帝国大学医科大学内科学科を卒業した（『学士会月報』第四〇五号ノ二『学士会会員氏名録』大正十年）。『日本小内科学』『赤痢病学』『ペスト必携』『臨床回診録』等、多数の著書がある。

二

『洗冤集録』は腹上死の原因を「精気」が消耗し尽くしたこととするが、実際には腹上死は、上野正彦「いわゆる性交死について」（『日本法医学雑誌』第十七巻第五・六号掲載、昭和三十八年）が説明するように、「脳動脈瘤、血管の硬化、心臓の肥大、梅毒、その他の潜在的基礎疾患の上に、性行為という生

理的興奮と消耗が負荷されて惹起されるものである。」（三三九頁）

それでは、『洗冤集録』が、腹上死した男子の陽物は衰えていない、とする点についてはどうであろうか。上野正彦『死体は語る』（文春文庫、二〇一〇年）は、『洗冤集録』は「作過死の場合は勃起したままであり、偽りの場合とは区別できると述べているが、この表現は間違っている。死ぬと神経系の緊張は解けるから、ペニスは必然的に萎縮するのが普通である。」（「情交」六十一頁）と述べている。実際、上野「いわゆる性交死について」（前掲）に表示されている、性交中に急死した男子の「主な剖検所見」の中に、『洗冤集録』の記述を裏づける所見はない。

ところが、矢野真千子訳ウェンディ・ムーア著『解剖医ジョン・ハンターの数奇な生涯』（河出文庫、二〇一三年）を読むと、イギリスの医学者で博物学者のジョン・ハンター（John Hunter、一七二八～一七九三）が、新婚初夜のベッドに入って半時間後に突然死したアーミジャー将軍の遺体を解剖して作成した「症例記録」に、「患者のペニスは半勃起状態のように大きくなっていて、精管には精液がいっぱい詰まっていた」と書かれている（第十章、二六四頁）、という。

アーミジャー将軍の遺体の「症例記録」は、The Case Books of John Hunter FRS, ed. Allen, Turk, Murley (London : Royal Society of Medicine Services Limited 一九九三年）に収められているAn Account of the Dissections of Morbid Bodies（「病的な身体の解剖の報告」）のNo. 142 The appearances on opening the Body of General Armigerである。それには次のように書かれている。丸括弧で囲まれた文はハンター自身が挿入した文である。

【和訳】

彼は六十歳ぐらいであった。そして長い間、疲労体質で、慢性的な病気であった。彼はしばしば、突然死の前兆であるめまいに襲われた。彼は心悸亢進、及び不整脈をかかえていて、リウマチ患者であって、痛風であった。

（彼は四十歳前後のメイドと結婚した。十一時か十二時ごろに彼女がいるベッドにゆき、そして約半時間後に彼はにわかに気分が悪くなり、救助が得られる前に彼は死亡した。彼が床入りの行為の最中に気分が悪くなったのかどうかわから

ない。）

彼は死の三十時間後に解剖された（三月のことであった）。頭部を切開し、脳を検査した時、私は、病気にかかった、もしくは普通でない箇所を見出だすことができなかった。（脳の底面にあった一つの小さな白いかたまり、もしくは白色体を除いて。それは、大きいピンの頭ぐらいの大きさで、脳の実質よりも固かった。脳の二つの側面の小室もしくは腔の中の体液は、血液で少し染められていた。しかし、そのことは、血液の赤い部分の浸出によって、死後に生じた、と私は思う。）肺は、見たところ、全く正常であって、どんな癒着もなかった。心臓は、非常に大きい点を除いて、外観は正常であった。大動脈の弁は、固く動かせないほど硬化していた。そして弁の一つは心臓の中に向かってかなり曲がっていた。このことは、血液の逆流によって、血液の循環を、そしておそらくは、そちら側の大きい心室を形成する手段を大いに妨げたに違いない。

上方に向かう大動脈は、多くの箇所で拡張され、硬化していた。

腹部の内臓はどこから見ても正常であった。ただ、胃の中

に多量の空気が入っていた。（ペニスは、膨満してはいなかったけれども、ほとんど半分勃起していて、非常に大きかった。睾丸は小さく、副睾丸の上部の上に小さい嚢腫があった。白膜を通して細管が大変はっきりしていた。そして静脈は血液で充満していた。輸精管をしぼってみると、それは精液で満たされているようであった。膀胱とペニスは、この導管をさらに検査するために取り出された。輸精管は、端から端まで白い体液で満たされていた。しかし、その入り口の近くでは、体液はより濃い色をしていた。けれども、嚢［精嚢？］〈ハンターの弟子ウィリアム・クリフトの注。佐立注〉の中ではそうではなく、そこでもむしろ均一の濃度であった。嚢は普通であった。その中身は黄褐色で、体液に混じって澱状の物を含んでいた。

これらの外観は、単一では、そして彼が置かれていた状況から切り離されては、彼の死を説明するのに決して十分ではなかった。しかし、両方合わせると十分であった、と私は思う。）

この記録には、新婚のベッドに入って約半時間後に気分が悪

くなり、救助が得られる前に死亡した男子を、死亡してから三十時間後に解剖したところ、「ペニスは、膨満してはいなかったけれども、ほとんど半分勃起していて、非常に大きかった。」（原文。The Penis was almost half erected, very large, although not turgid；）と書かれている。この観察がハンターの見間違いではなかったとすると、腹上死した男子を死後三十時間以内に検査すれば、『洗冤集録』が記すように、陽物が衰えていない場合があるのではなかろうか。門外漢がとんでもないことを書いているのかもしれないが、宋慈やジョン・ハンターに加勢して恥をかくのも悪い気はしない。